

## 藤岡 蔵六論 (下)

関 口 安 義

本号では和辻哲郎の藤岡蔵六の訳書批判にはじまる、いわゆる「藤岡事件」をまず詳説する。和辻がなぜ蔵六の処女出版に強い抗議の言説を叩きつけたのか、その疑問を解くためにいくつかの文献を発掘し、それが蔵六の人づき合いのまずさから来ていることも論証した。次に東北帝国大学法文学部に就職できなくなり、新設の甲南高等学校に行き、教育に専念する蔵六の姿をとらえる。そこに「薄幸の哲学者」を読む人もいるが、甲南高校は蔵六にとって一種のアルカディアとして存在したことも述べた。最後に芥川龍之介言つところの藤岡蔵六の「理想主義」とは、常に向上の意欲をもって歩むところにあつたことを述べ、彼が理想実現のため、他のことに気を配らなかつた点を指摘した。世には能力がありながら真価を発揮し得ず、埋もれてしまう人がいる。藤岡蔵六はまさにその典型であつた。本論は芥川龍之介に導かれての藤岡蔵六論の最終回である。

キーワード 和辻哲郎、藤岡事件、甲南高校、理想主義、芥川龍之介

### 九 和辻哲郎の蔵六批判

フライブルクでの留学生生活が始されて一年、ここに思いもよらぬ事件が起こる。彼の帰国後の仕事を、

そして将来をも決めた事件であつた。先輩和辻哲郎による厳しい蔵六批判の文章が、日本で発表されたのである。それは岩波書店刊行の雑誌『思想』の一九二二（大正一一）年七月号に載つた「藤岡蔵六氏のコーエン

「訳述について」と題された書評であった。蔵六の大著『<sup>エン</sup>「純粹認識の論理学」の最初のわずか五ページを取り上げ、「検閲」し、徹底的に否定した文章である。

遠くドイツの学園都市フライブルクにあって、この居丈高な、底意地の悪い書評にふれ、蔵六は呆然とする。それは蔵六にとつて「不可解」で、「悪罵極言」の文章とまで感じられたのである。まずは和辻哲郎の文章を見ていこう。冒頭の一節を書き写す。

独逸語に親しみのない者には、有名なコーエン（コーヘンと発音するのが本当かと思ふが）にも近づくべがなかつた。そこへ藤岡氏がコーエンの名著「純粹認識の論理学」を訳述した。その後自分は、この訳述書を読んでコーエンを理解し得たりとする幾人かの人を見かけた。自分自身も、藤岡氏が明快な頭脳の所有者であるといふ噂にもとづいて、幾人かの人にこの書を推挙した。ところで近頃、或機縁のためにこの書の一部を原本と対照して見ると、意外にも、多くの不満を感じざるを得なかつたのである。自分は自分がこの書を

推挙した人々に対してお詫びするために、或はまたコーエンの名譽のために、更に藤岡氏自身のためにも、この書の出来栄を批評して藤岡氏の改訂を要求するのが決して意味なきことではないと思ふ。

右の一節だけからもわかるが、これは一種の爲にする批評なのである。ある「目的」をもつて書かれた文章である。「目的」とは、研究者藤岡蔵六の抹殺である。

和辻哲郎は藤岡蔵六の訳述書の「緒言」に見られる、いかにも蔵六らしい「余の力足らずしてこれを完全なる訳書たらしむる能はず、また純粹なる述作たらしむる能はざる」との謙遜に満ちたことばを利用し、「この「力足らざる」といふ口実を抄訳の口実としては受け取ることが出来ぬ」と言つ。そして「氏はコーエンの忠実なる翻訳者たることを厭つたのではなからうか。もし然りとすれば、氏のこの仕事に対する態度は極めて不真面目である。氏はその学術的良心を疑はれねばならぬ」と決めつける。

和辻哲郎は一八八九（明治三二）年三月一日、兵庫  
 県神崎郡砥堀<sup>とぼり</sup>村仁豊野<sup>にぶの</sup>（現姫路市仁豊野）の医師の次男  
 として生まれた。医師の子という点では、藤岡蔵六と  
 同じである。蔵六より二歳年長である。しかし、姫路  
 中学校を経ての一高入学は、一九〇六（明治三九）年  
 九月なので、蔵六や芥川龍之介が一高に入った時は、  
 すでに東京帝国大学文科哲学科の学生だったこと  
 になる。一高時代の同級生には、天野貞祐・九鬼周造・  
 児島喜久雄らがあり、上級生には同郷の魚住影雄（折  
 蘆）がいた。一高時代は『第一高等学校校友会雑誌』  
 を舞台に、小説や論文を発表、大学に入ってからには小  
 山内薫らと第二次『新思潮』の同人として活躍した。  
 『帝国文学』や『スバル』や『三田文学』にも寄稿し  
 ている。大学卒業論文は、「シヨーペンハウエルの厭  
 世主義および解脱論」(On Schopenhauer's Pessimism  
 and Salvation Theory)であった。

大学卒業後、姫路中学校時代からあこがれていた夏  
 目漱石門に入り、木曜会の主要メンバーの一人となる。  
 芥川や久米正雄や松岡譲、それに蔵六が漱石門入りす  
 る二年前の一九一三（大正二）年秋のことであった。

漱石は若き和辻哲郎をとらえて放さなかった。のちに  
 和辻は漱石を評して、「私が漱石と直接に接触したの  
 は、漱石晩年の満三箇年だけである。しかしそのおか  
 げで私は今でも生きた漱石を身近に感じることができ  
 る。漱石はその遺した全著作よりも大きい人物であつ  
 た。その人物にいくらかでも触れ得たことを私は今で  
 も幸福に感じている」と書くことになる。

和辻は漱石に会う少し前の一九一三（大正二）年十  
 月に、内田老鶴園から処女出版『ニイチエ研究』を出  
 していた。続いて一九一五（大正四）年十月に、同じ  
 内田老鶴園から『ゼエレン・キエルケゴオル』を刊行。  
 一九一八（大正七）年十二月には『偶像再興』を、翌  
 年五月に『古寺巡礼』を、さらに一九二〇（大正九）  
 年十一月には『日本古代文化』を、いずれも岩波書店  
 から出している。この間翻訳の仕事もある。もともと  
 彼は健筆であり、出発時のタイトルだけを見ても、そ  
 の関心の広さがうかがわれる。彼の業績は、現在二十  
 巻におよぶ『和辻哲郎全集』(岩波書店、一九六一・一一  
 ・一〜六三・六・一四)に結集しているほどだが、若い  
 時から和辻哲郎はさまざまな分野で、その才人ぶりを

示していた。

だが、官立大学の常勤の職にはなかなか恵まれず、全集第二十巻の「年譜」を見ると、一九二〇(大正九)年の項に「四月、東洋大学で講義をはじめた」とあり、一九二二(大正一一)年の項には、「四月より政法大学、慶応大学、津田英学塾に教鞭をとる。慶応大学は一年間だけ、津田は二年間、法政は十四年三月まで」とある。この事實は彼の蔵六批判と深くかわる。つまり、すでに三十三歳にもなりながら、いまだ官立大学の常勤ポストを得ない優秀な学徒であった和辻哲郎の妬みやいらだちが、後輩の俊才に対して爆発したと言えなくもないからだ。和辻自身は、その行為を藤岡への再批判の中で、「癩癩」ということばで説明している。彼の『自叙伝の試み』によると、それは祖父や父瑞太郎ゆずりのものであったという。が、こういうやり方の書評は、何も大正時代の話ばかりではなく、平成の今日にもある。すぐれた書物へのジェラシーから成る怨念批評を、わたしたちは学会雑誌の書評欄にまま見出す。本筋に戻ろう。

和辻は蔵六の著書のコーエン引用文を取り上げ、

「誤訳」だという。そして「氏は、コーエンの明快な文章を氏の選択と私解とによつて混乱に陥れたのである」とする。また「藤岡氏はコーエンの文章を意図的に変更してある」とか、「たゞさへ難解な箇所を益々難解にしている」と言い、コーエンの心理主義批評の箇所の訳解は、これまた誤読だとする。そして「原著の理路を忠実に辿るところのExpositionをもなし得ずして、たゞ無責任な抽出によつて原意を伝へんとし、しかも「力足らずして意外の点に誤解なしとも限らぬ」と豪語する如きは、氏の態度を疑はざらんとするも得ざらしむるものである」とまで言う。和辻はさらに語を継いで、「自分は氏の学術的良心を疑ふのである」と言い、結びでは「少なくとも氏の態度が真面目を欠くといふ断言はなし得ようと思ふ。学問のために、コーエンのために、また氏自身のために、氏は態度を新にしてこの訳術書の断乎たる改訂を企つべきである。でなければ氏の学者としての生命は失はれる」と書いている。

藤岡蔵六の『コーエン純粹認識の論理学』の翻訳は、岩波書店刊行。菊版、本文のみで五四六ページ。「緒言」

「目次」「雑録」「索引」を加えると六〇〇ページに及ぶ大冊である。「緒言」によると、原著改訂第二版を底本にしたという。重要なのは、「こゝに訳述するのは原文を翻訳するに当り多少の取捨選択を施し従つて其間何程か訳者の私解を加へ以て一種の述作たらしむることの謂である。併し乍ら本書は飽くまでも翻訳を主となし多く述作せず、偶々其必要がある場合にも努めて原意を逸せざらんことを期した」という「緒言」の一項である。コーエン紹介者としては、このような工夫は必要だと思つたのであろう。そこがねらわれたといふべきか。工夫と言へば、本文は小見出しを採用するなどして読者の便を図つている。また、二十六ページもの索引は、十分考慮されたもので、かいなでのものではない。書物の造りも立派である。

巻末には「雑録 序説に代へて」があり、ヘルマン・コーエンの略歴からコーエンの主書六部の紹介やら、新カント派の領袖としてマールブルク大学を率いたその位相が述べられていく。今日、冷静な目で読むと、本書の価値はそれなりに認められるものである。コーエンの論理学が、形式的論理学ではないことを感

六は強調する。コーエンは感覚の問題も素通りしていいないとも言つ。次のような興味ある記述もある。

感覚の問題に就ては余は特に論じて見度いと思ふけれどもそれは容易の業でないから今は省略する。西田博士著『自覚に於ける直観と反省』の中にはコーエンの感覚に関する見解が頗る精細に論評せられて居る。また田辺博士の論文「論理主義の限界」(哲学雑誌所載)にもそれがある。同博士は感覚への顧慮がコーエンの論理学をしてヘーゲルの論理学に比し特徴あらしめた点であると云ふ様に論ぜられていたと記憶するが確かに傾聴すべき説であると思ふ。併し博士がコーエンの云ふ根源を感覚的の意味に解し其の論拠の上に立つて論理主義に限界ありと推断せられたのは如何なるものであらうか。余は此点に関し他日博士の教を乞ひたいと思つて居る。

「雑録 序説に代へて」の最後の方には、コーエンのカントとフッサールとに対する関係が考察されて

いる。そして、これからマールブルクへ行き、亡き著者をしのび、多くの学徒に接し、親しく彼らの意見も聞きたいという抱負も語られている。巻末に「渡欧の途すがら／上海碇泊中 クライスト号にてノ大正十年八月十日」とある。藤岡蔵六の全力を賭しての仕事であつたことは、右の「雑録」の文章からも伝わってくる。何はともあれ、本邦はじめての訳書である。

ドイツのフライブルクで、和辻哲郎の「藤岡蔵六氏のコーエン訳述について」という文章を読んで、蔵六は当惑する。一体全体どうしたのか。彼には和辻の意図が読めなかつた。ドイツに来ても他の日本人とあまり交わらず、寸暇を惜しんでひたすら研究に打ち込んでいた蔵六には、和辻の批判文の背景が見えなかつたのである。見えたなら、つまらぬ反論はせずに、やりきれない気持ちは、自己の仕事のエネルギーに転化させ、一心に研究に打ち込んだことだろう。そしてより大きな著述を成すこともできたはずである。

若き日の友芥川龍之介が、文壇登場に際して「出る杭は打たれる」式のさまざま悪評・酷評にさらされた時、反論することなく「MENSURA ZOILI」のよう

な作品を書き、やりきれない思いを作品に転位する、さらには次作を見よとばかりに、文壇人の悪罵に等しい批評をエネルギーに精進したという生き方が、蔵六にはできなかったのである。直接反論の拳に出たところに、蔵六の愚かさや弱さがあつた。彼は気張って、反論を書く。それは「和辻哲郎氏の批評に答ふ」と題され、雑誌『思想』の一九二三(大正一二)年二月号に載つた。長文の反駁文である。四〇〇字原稿用紙にして約五十三枚である。ちなみに和辻の最初の蔵六批判文は二十六枚だから、驚くべきことにその倍の量を用いての反論となる。冒頭の箇所を引用する。

和辻哲郎氏が本誌第十号(大正十一年七月号)に於て余のコーエン訳述についてなされた批評に對し答へたいと思ふ。初め余は氏の批評に對し何の弁明もしないで、それを世の識者の公正なる批判に任せ、余は余の信ずる道をたゞ黙つて歩んで行けばよいと思つて居た。ところが二三の先輩学友から、それはいけない、公にされた問題に對しては君は公人としての立場を明らかにする必要が

あると云はれ、余も成程それもさうだと考へたので答へることにしたのである。

氏の批評は単に訳語訳述法の詮議と云ふが如きに留らないで、進んで訳述者の態度その学術的良心にまで及んで居るが故に余の弁明もそれ等の全般に亘つてなされねばならぬのであるが、氏が余の態度を不真面目であると云ひ、余の学術的良心を疑ふと云ふその理由は、余のなせる成績の検閲によつて證據立てられて居ると考へて居るやうであるから、余はまづその證據調べからはじめて行きたいと思ふ。

藤岡蔵六は、「何の弁明もしないで、それを世の識者の公平なる批判に任せ、余は余の信ずる道をたゞ黙つて歩んで行けば」よかつたのである。が、愚かにも彼は反論した。蔵六は和辻の批判文を四つほどに分け、一つ一つ、その誤解や和辻の云う誤読が正鵠を得ていないことを論証しようとする。まず開巻第一ページの抄訳の部分に関しては、「コーエンの云はんとするところを充分に現はし得ると信じた」(和辻)からでは

なく、その「原意を伝へ得ると信じたに過ぎない。誰か抄訳によつて原意を遺憾なく充分に伝へ得ると信ずる者があらうか」と一蹴する。また、初めの部分の抄訳文を取り上げ、「どう読んでも次のような意味にかならない」とし、和辻が言を重ねているところは、「氏の誤解である」と言い、二者の文章の丁寧な対照を示した上で次のように言つ。

以上の対照によつて知られるやうに、氏は余の訳文を誤読し、其の誤読的解釈の上に立つて余の訳述を批評し、余の説くところはノンセンスであると結論したものであつて、此の如き批評の仕方  
は余の頗る迷惑とする所である。若し氏にして余の拙い訳文をも素直に読むだけの雅量と、さうして噛み砕いて読むだけの親切とを有つてくれたならば、然様な誤読をしないのみならず、余の説く所も亦大体に於て氏の見解に一致して居ることを発見し、他をひとノンセンス呼ばはりしないで済んだであらうと思はれる。

また、訳述書第三ページ六行目以下に対して、「(藤岡は)コーエンのなした三個条の長い説明の内から極めて乱暴に二三行を抜粋」しているに過ぎないと、和辻が言ったことに対して、「余の抄訳は拙くとも、拙い乍らに苦心したものと」と反論する。蔵六にするなら、冒頭部分は一高時代の恩師三並良に見てもらい、書き直していたこともあって、安易に誤りだとされたのでは、たまらない面があったのであろう。それゆえ「不備の点のあることは充分に認める」としながらも以下のように述べる。蔵六の怒り心頭に発した一節である。

氏の云ふが如く、「極めて乱暴に二三行を抜粋した」ものであるとされては訳述者は浮かぶ瀬がなくなる。況んや「問を変更して置きながら答だけを同様にする」ことが既に氏(藤岡を指す)自身の思想の歩みの空虚であつたことを示すのみならず、コーエンの原意を伝へようとする氏の試みから云へば、実に言語同断の所為である」とまで悪罵極言されては何と答へてよいか返事の仕様さへも分

らぬ。殊に況んやそれが冤罪であり、非難者自身の誤解誤読に基くに於てをや。

次に藤岡蔵六は、和辻哲郎の文章の矛盾を衝く。和辻は「藤岡蔵六氏のコーエン訳述について」で、しばしば「氏(藤岡を指す)の言葉をそのまま用ゐるとすれば」と書くが、それは和辻の捏造であるといふのである。筆者に言わせれば「捏造」というよりも、「類推」と言つたらいいだろうか。あるいは「勇み足」とすべきか。論争にまま伴つ悪しき行き違いでもある。

蔵六の反論文「和辻哲郎氏の批評に答ふ」を読んでいくと、二人はこの時点では、互いに名を知つてはいいたが、「面識はなかつたことがわかる。『思想』という注目される月刊雑誌を谷川徹三・林達夫らとはじめた先輩和辻の名は、学界に知れ始めていた。一方、母校東大の哲学教室の優秀な副手の名を和辻が知らないわけはなかつた。が、どついつ訳か双方とも面識はなかつたのである。それなのに和辻は藤岡蔵六の性格まで知つているような書き方をした箇所があるのに蔵六は驚く。「これが彼の有名な理念である」と蔵六が書いたこと

に対し、和辻が「彼の有名な」は贅句だとし、蔵六を批判したことへの反論となる次の箇所だ。

余は此句を、原著に於て重要な役目をつとめる理念と云ふ語を強調して以て読者の注意を喚び起す為めに使用した丈けのことであつて、決して他に興味のあつたわけではない。然るに和辻氏は此の一句を捉へ、『彼の有名な』と云ふ贅句を挿んだところに藤岡氏の態度が躍如としてうかがはれる」と云つて居る。余には何のことだか分らない。と同時にこんな一句の挿入によつて如何にして一面識もない人の態度が躍如としてうかがはれ得るであらうか不思議でならない。加之、氏は更に進んで、「この態度の故に自分は氏（藤岡を指す）の学術的良心を疑ふのである」と論断して居る。何と云ふ根拠のない疑ひであらうか。疑ふと云はれゝば致方ないけれども、斯様な疑ひ方をするに云ふことそのことが余には不可解である。

蔵六の非社交性が、ここでも災いをなしたようであ

る。もしも和辻と面識があつたなら、換言するならば石部金吉のとき生真面目な理想主義者、——芥川龍之介のいう「正直一箇の学者」の性格にふれていたらなら、右のような書評に託しての藤岡抹殺論など書けるわけがなかった。和辻は藤岡蔵六の人となりを知らないで、「辣腕家」と思い込んでしまつたかの感がある。

蔵六はいまだ和辻の論述の背景に気づいていない。それだけに自分の処女出版への風当たりや強さに驚いているのである。蔵六のやりきれない悲しみの表れた感想部分を「和辻氏の批評に答ふ」から引こつ。

氏はまた、余が「全力を尽した」と書いて居るにも拘はらず、「が自分の受けた印象によると氏（藤岡を指す）は決して全力を尽しては居ない」と云つて居る。何故に和辻氏は、斯くまでに余の言葉余の文章を、逆に解し、曲げて解し、裏からのぞいて見なければならぬのであるか。余にはどうしても合点が行かない。しかし若しそれが単なる印象記であるならば、他人が如何なる印象を受

けたと書かうとも随意であるかも知れぬが、それを根拠として当事者の態度の是非にまで論究することは果して正しい批評の仕方であらうか。自己の印象から推して対者の態度とか良心とか人格とかに触れることは余程慎むべきことではないかと思ふ。氏は何故に「全力を尽した」と言明してあるものを「全力を尽して居ない」と観察するのであるか。余は嘘は云はない、ほんとうに余は当時の余の四圍の事情の許す限り時間の許す限りに於て全力を尽したのである。試みにも考へて見るがいゝ、あれ程のむづかしいそして大部な書物を、不真面目に碌々力も用ゐないで訳出し得るであらうか。況んやこれを印刷に付して学界に投げ出す以上、あらゆる批評も攻撃もはじめから覚悟して居なければならぬ。余は全く一生懸命に努力したのである。今から回顧して見てもあの時は全く一生懸命であつた。あれより上のことはあの時の余にはどうしても出来なかつたのだと云ふ感じがする。緒言に「是れ現在の余のなし得る最上の努力である」と書いたのは当時の余の気持ちの偽らざ

る告白である。

右の文章に偽りはない。処女出版の大著を蔵六は精いっぱい、「全く一生懸命に努力」して刊行したのである。一高時代の藤岡蔵六は、井川(恒藤)恭の「向陵記」に描かれているように、中寮三番や北寮四番の仲間とよく交わっている。彼は孤高の存在ではなかつた。芥川や井川や長崎太郎と、そして他の仲間とも親しい交わりをしている。が、副手時代、コーエンの翻訳に当たつた当時は、他者とのつきあひすら制限し、訳述に没頭したのであつた。それにしても、「癩癩」に駆られた先輩の理解を欠いた冷たい批判は、彼を深く傷つけることになる。

藤岡蔵六の弁明は右の箇所を除くと総じて冷静で、謙虚である。彼は和辻さえ誤読するような訳述書を「そのまゝ世に出して置くわけには行かない。直ちに之を店頭から葬つて学界並に読者に対し謝罪の意を表したい」とまで言い、重版中止を岩波に依頼したとまで言う。蔵六らしい、眞面目くそまじめなやり方だ。終わりに蔵六は、「余は氏が余に深き反省の機会を作り、学問

向上の途に強い鞭撻を与へられたことを感謝する。余は従来よりも更に一層深き立場に立ち、自己の態度を新にし、学問的良心を磨いて真理の道を歩んで行きたいと思ふ」とへりくだった態度で書きつけている。

藤岡蔵六の反論を読んだ和辻哲郎は、『思想』の翌月号（一九三三年三月号）に「藤岡氏の反駁を讀みて」の一文を載せる。原稿用紙二十二枚である。中で和辻は「藤岡氏の学才を否定するよりも、氏が客気からられて充分その学才を生かせなかつたことを指摘せむと欲したのである。腹を立てゝ書いたためにその意図が充分現はれてゐなかつたかも知れぬ」とか、「自分の書き方はあまりに挑戦的であつたかも知れぬ」という反省の弁も見られるものの、基調は変わらない。そこには藤岡の言葉じりをとらえての非難と、「冤罪をきせた」、「原文を誤解した」といふ氏の非難に対して自らを護る」との立場での言い訳が展開するのである。

和辻哲郎が行つた書評にこと寄せての藤岡蔵六批判と、それに対する蔵六の反論、さらに和辻の再批判と続く論議は、二人の感情的な論争で終わらなかつた。それは蔵六帰国後の就職にもひびくこととなる。

## 十 藤岡事件

ここで問題とする「藤岡事件」とは、先に文献として紹介した出隆の「藤岡事件とその周辺」に回想された事柄をさす。出隆は「藤岡蔵六君の事件」というふうな言い方もしている。具体的には和辻の藤岡批判論文がきっかけで、帰国後の藤岡蔵六が、内定していた東北帝国大学法文学部への就職が駄目になつたという事件である。

「藤岡事件とその周辺」は、勁草書房から一九六三（昭和三八）年十一月二十日付で刊行された『出隆著作集7』収録の『出隆自伝』の「第12夜」に相当する。そこで出隆は、「或る意味では僕が最もよく——一方的にでなしに、——事件の真相を知つてゐるような気がする」と言い、「あまり話したくない」とも言いながら、次のように、語っている。

なにぶん、純粹に学問上の論争ならいいんだが、だいたい「事件」となるとそういう純粹なのはないもんで、ことに藤岡君の場合など、「純粹」に

「論理的」で「厳正」なものであってよきそのなのに、実は逆に、——これが本当の人間の論理なのかもしれないが、——いろんな不純な非合理的な感情的諸要素が、なんだか闇取引から派閥抗争的な要素までもが、入りまざった奇怪な事件なんので、まあ、結局、藤岡君の「不徳の致すところ」と言ってしまうえば、そうにちがいないだろうが、それだけではすまされないものがあり、それだけでは割り切れないものがあつて、それが僕にも割り切れないまま残つてゐる。

出隆の回想は、「とにかく、あの事件の口火を切つたのは、藤岡の翻訳した本を批評した和辻の書評論文だ」とし、藤岡蔵六が東北帝国大学法文学部就職を断念し、新設の甲南高校(旧制)に行かざるを得なかつた事情を以下のように語る。やや長くなるが、藤岡事件の核心に触れていると思われるので、あえて引用する。

そのときの僕としては、和辻君の執筆の動機が

他にあるなどとは思わなかつたから、(また今日でも、他にあつたと考えたくはないし、他にあつたという証拠もみつけないが)、ただそれだけの動機から執筆したものとしては批評の仕方やその発表の形式が大袈裟すぎるし、後輩の藤岡などに対するものとしてはきびしすぎる、(なんか藤岡に対して含むところでもなくて、まあまあやつつけるのは可哀そうだが)、という気はしてはいたが、しかしそのときはそのときで、まあこれも和辻君のいつもの(かれと話していてしばしば僕を感じた)理詰めの論法にみえるところの・なんでも割り切らないと承知しない・いわば entweder-order 式の・直ぐでないなら曲だろつ式の・きびしく突つこんでいくあの遣り口の一例だろつと思つた。それで、どこか虫のいどころが悪くて、そのきびしさが自分の親しい岩波の出版書といえども学問の厳格性はこれを許さないとしようつな学的正義の刃をふりあげさせたんだろつ、というように考えて、その場はそれですんで、よほどのうちまで藤岡がどうしとるかとも考えなかつたが、実

は、そのまえから、藤岡蔵六君の身辺（ことにその就職問題）をめぐる先輩のあいだになにか「こた」があり、和辻君の批評論文が、——たまたま偶然的にか、或いはなんらか目的意識的に仕掛けられたのか、——その導火線になって、結局藤岡君は、不適格と判定され、その約束されていたところの席（またはそれに就くことは僭越だと思われていたところの席）すなわち東北大学の例の新設の法文学部の教授か助教授かの席を棄てて、こっそり甲南高校に移されるにいたった、というのだった。

問題は、もし藤岡が、和辻の批評した通りに学者としては不都合だから、大学の教授たるには不適格だ、というだけのことだったら、話は別で、まあ、きれいさっぱりしてるが、問題は、その約束の仕方やこれを破約にもちこんだ仕方をどう了解し、どう評定するかであり、そこらに或る暗いもの・見にくいものが潜んでいそうだから、問題になっただんだ。……いいえ、いまでも問題だろうが、もういまさら問題にする気はない。まあ、結

論的に僕の感じだけを言うと、その真相がわかるうとわかるまいと、不愉快な事件だったというのと、藤岡の「不徳」につけこんで見にくい策動をした人が学界にまであったとすれば、（そうした人または人々があつたかどうか明らかでないのが策動というものだろうが）、そうだとすればそれもなくないが、結局、この事件は、藤岡の「不徳」の致すところ」というほかはなかるう。しかし、その不徳というのが、或る点では、藤岡の側のみにあるのではなく、ただかれを損をする側に立たせた限りのかれの不徳が、かれの生来の性格ともみえる或る暗いかげ、或る独善的な性格に関連しているように思われるだけに、友人としては気の毒でならない。……

ここに藤岡事件の全貌が明らかにされている。藤岡蔵六は桑木巖翼教授の推薦のまま、いち早く新設の東北帝大法文学部教官のポストの内定を見る。が、先輩を出し抜いての行為が知れるに連れ、反発をくらうことになったのである。出陣はこの後で、「和辻君が、

その結果からみれば、あだかもその誰かにけしかけられたか、暗示されたか、或いは和辻自身がその誰かの一味だったのかとも思われやすい恰好で、あの批評論文を発表した」と書いている。出隆には、岩下壯一や九鬼周造のような秀才と同級だった和辻は、本格的な哲学では太刀打ちできないと自認し、ニーチェや古寺巡礼をやっていたと見られたのに、「コーエン論理学のような本筋の哲学」にまで手を出すのに意外な想いがしたというのである。

先にも述べたことだが、和辻は藤岡蔵六の人となりをもっとく知らなかった。絶えず向上を目指して努力する理想主義者であり、他人とのつきあいよりも学問に精進することを優先する、その性癖も知らなかった。ただ東大哲学教室の副手をつとめる辣腕の秀才というイメージがなかったたのである。この点では情報通の才気あふれる若き和辻哲郎の勳は、生きていない。彼がこの真面目な後輩の人となり、——高時代は芥川龍之介と井川(恒藤)恭と組んで「仲のいい三羽鳥」(出隆)とまで言われた友人関係や、その理想主義者の一面を知っていたならば、否、少しでも現実の蔵六に

接していたならば、このような高飛車な批判文は書けなかったはずである。知らないからこそ和辻はその才気をもって、「学的正義の刃をふりあげ」(出隆)蔵六退治に乗り出したのであった。いまだ官立の大学教授のポストを得ない和辻の陰湿な不満が噴出したと言えなくもない。

けれども、恫喝的文章は内容がない。ことはが宙を飛んでいるのである。そうしたくけおどしの文句を並べた文章は、虚勢に過ぎず、ああこれは、為にする批評だなどと識者はすぐに理解したことだろう。ドイツのフライブルクで日本の雑誌『思想』を開き、和辻論文に接した蔵六には、ただ驚きと怒りがこみあげるだけだった。処女出版が受けるには、あまりにむごいことばの羅列だったからである。しかも彼には、和辻の意図が読めなかった。「何故に和辻氏は、斯くまでに余の言葉余の文章を、逆に解し、曲げて解し、裏からのぞいて見なければならぬのであるか。余にはどうしても合点が行かない」とは、いまだ若くして、生真面目な蔵六の偽らざる心境であった。彼は詳細な反論を企てる。

ここで蔵六は反論など書かずに、先にも述べたようにやりきれない思いを研究のエネルギーに転化すべきだったのである。が、彼は反論を和辻の文章の倍も書いて日本に送った。当時は海外からの手紙は、船便のため時間がかかった。論争するには、外国については絶対に不利である。それを顧みず、彼は反駁文を書いて送った。和辻の最初の蔵六批判の文章が発表されて七か月後、人々の関心が薄らいだと思われた頃、蔵六の「和辻哲郎氏の批評に答ふ」の文章が『思想』に載る。ここで再び蔵六は話題の主となってしまつたのであつた。タイミングは実に悪い。内容は前述のように、いかにも真面目な蔵六らしく、四つの項目を立てて忠実に反論したものであつた。

しかし、出隆が「藤岡事件とその周辺」でいうように、「論争的論文はとかく不純なインテレストを交えて書かれるだけでなく読まれるのが昔も今も同じで、和辻の批評が「苛酷」にすぎると読まれたとすれば、藤岡の反駁はいよいよもつて「不遜」だと読まれて、これが事態をますます藤岡にとって不利にした」ということになる。まさに蔵六にとつては、「時、利あら

ず」だったのである。しかも、翌月の『思想』で、蔵六の反論はたちまち和辻の餌食となつてしまつたのである。再び反論したくとも、それが載るには半年以上かかることあつてはどうにもならぬ。

#### 十一 甲南高等学校へ

一九二四（大正一三）年一月十三日、藤岡蔵六は二年半のヨーロッパでの在外研究を終えて帰国した。同年四月からは、東北帝国大学法文学部に勤務するはずであつた。だが、事態は蔵六が日本を留守にしていた間に大きく変わつていた。蔵六の東北帝大行きを阻止する運動が、活発化していたのである。

出隆の「藤岡事件とその周辺」には、和辻哲郎の蔵六批判文がきっかけとなり、藤岡蔵六に関する「いろいろの噂が飛び、結局、先輩たちの先輩に当たる波多野（筆者注、精一）先生のお声がかかりだか忠告だからで、ついに総長も断念して藤岡を断念させ、その代償に甲南高校の席をみつけて藤岡をそちらにまわした、というのが事件の荒筋らしい」とある。

蔵六には周りを気にしないという性癖があった。それは父春叢ゆずりのものであり、さらには祖父元甫にも見られたものであった。要は社交下手である。先輩を出し抜いたような形で、新設の東北帝大法文学部の純哲担当教官に内定したことは、蔵六には別に悪いこととは思えなかつたのである。東大の主任教授の桑木厳翼も認め、推薦してくれたことであつたからである。だが、世間はそういうものではなかつた。先輩への気配りが必要だつたのである。

子息藤岡眞佐夫の『父母の思い出とともに』によると、母清恵からの伝聞として、蔵六の代わりに東北帝大に行くことになつた先輩の石原謙が、「私のような者が参ることになりました」とあいさつに見え、また東北帝大の佐藤文学部長もあいさつに蔵六宅を訪れたという。敗者の蔵六への礼である。それが当時の常識だつたのである。が、蔵六にはそういう配慮が皆無であつた。気がつかないのである。また、そういう気配りを潔しとしないのであつた。

が、どの社会でもそうであるが、学問の世界でも人間性は問われる。協調性のない人間や独り善がりな嫌

われるのである。ひたすら勉学に明け暮れた蔵六には、他者への配慮を事欠く面があつた。そこが付け入れられたらすべきか。出陣は「藤岡事件とその周辺」の終わりの方で、藤岡事件に対し、次のような感想をもちます。

こういうわけで、はじめにも言つたように、この事件は、表面上、大学教授の人事問題の公正を期する争いで、結局、藤岡がひとり不正・不資格と判断されて、公正をえた形だが、なかが公正だか適格だか昔も今も相変わらずで、学力・才能に力点をおくか、人格・人物を主とするか、公正の尺度があいまいなだけに、口ゴスよりもパトスが、或いは口ゴスのうちにひそむパトスの強さいかんが、尺度になる。そこで、公正を期する教養ある人格者たち——プロタゴラスの命題を非難する哲学者たち——の厳密な人事にも、その厳密な秘密のうちに、よそからみると、およそ公正とは逆の暗いかけ引きや見にくい奪い合いがおこなわれていたようにも思われる。

藤岡蔵六が旧制甲南高等学校に哲学・倫理・心理の教授として赴任するのは、一九二四（大正一三）年九月である。辞令は八月三十一日に出ている。帰朝後、同年五月から八月までは、法政大学の非常勤講師を務めていた。芥川龍之介が蔵六の不遇な状況を知るのは、このころのことである。藤岡眞佐夫の「父母の思い出とともに」には、眞佐夫の生まれた一九二四（大正一三）年十月三十一日からほど経ていないある日、芥川が遊びに来て、眞佐夫を抱いたとある。

甲南高等学校は神戸市東灘区岡本にある私立の学校である。一九一九（大正八）年に創立された甲南中学校が一九二三（大正一二）年に七年制高等学校へと発展し、誕生したものだ。創立者は平生鉦三郎で、個性を尊重した学園作りを目指し、少人数教育に特色を示していた。卒業生の多くは、一流大学に進学した。草創期の学園では、優秀な教師を求めていたのである。

蔵六は当初単身で、やがて一家をあげて関西に移り住んだ。はじめは神戸近くの本山村に、次に魚崎町に住んだ。甲南高校には学校の近くに、教職員住宅もあつたが、藤岡眞佐夫の『父母の思い出とともに』による

と、「父は社交性がなく、そういう所を好まず、相当高い家賃を払って魚崎に住んでいた」とのことだ。

甲南高等学校教授時代の藤岡蔵六について語った唯一の文献に、野田弥三郎の「薄幸の哲学者：藤岡蔵六さんを偲ぶ」がある。野田は甲南高校第二回卒業（一九二七年三月）組であるから、蔵六が担当し、最初に卒業させたクラスの学生であった。同窓会名簿を見ると、この年の文科生には、後年東大仏文科を出て仏文学者となった小場瀬卓三（東京都立大学教授）や東大国文科を出て国文学者となった志田延義（山梨大学、鶴見大学教授）らの名が見える。皆、蔵六の授業を受けている。

甲南高校での蔵六の授業は評判がよかった。なにせドイツ留学から帰朝したばかりの新進教授とのふれこみでの就職であったから、学生たちも期待して授業に臨んだことであろう。島之夫という第二回卒業生の回想には、「その頃は珍らしい洋服を着ておられました。ダブル・プレストという、上衣の襟が重なるものでした。ドイツから持って帰られたものでしょう。／藤岡蔵六先生は、真面目一本の先生だったという感じが残っ

ています」とある。また、右の志田延義は甲南時代を回想し、「人格的人間的とでもいふやうな点まで影響を受けたと思ふのは、藤岡先生と池山先生(筆者注、池山栄吉)とであるやうに存じます」と言つ。

哲学の授業では、『波多野精一の『西洋哲学史要』、大西祝の『西洋哲学史』を精読するよう勧めた。コーエンやナトルブ、リツケルトを講義するときは熱情的語調をもつて語つたといふ。先の野田弥三郎の「薄幸の哲学者：藤岡蔵六さんを偲ぶ」には、「哲学などに興味をもつ生徒は指折るほど少なかつた甲南高校で、蔵六さんがあのように張り切つた講義をなさつたのは、今からふりかえつてみて不思議にさえ思われる」とある。初の単行本が散々の非難を浴び、その結果、予定されていた東北帝大に就職できないという不遇な状況下、彼は教育に一縷の望みを託したかのようであつた。なお、野田は出隆と藤岡蔵六という二人の哲学者を並べ論じ、次のように言つ。

蔵六さんは大正五年に、出さんは大正七年に東大の哲学科を卒業し、その後二、三年間、哲学研

究室に助手として勤務されている。そして、蔵六さんはコーエンの「純粹認識の論理学」の抄訳を岩波書店から出版され、出さんは自著の「哲学以前」を大村書店から出版された。いずれも大正九年頃のことで、兩人とも三十歳になるかならぬかの若い哲学者だつたのである。

この二つの労作が二人の若い哲学者の前途の明暗をクッキリとわかつことになつたのは、奇縁とでもいうほかない。出さんの著書が青年学徒の必読書とまで言われ、西田幾多郎の「善の研究」とならび称賛されたのに、蔵六さんの労作は和辻哲郎という岩波閥のリーダーによつて酷評され、約束されていた東北大学の教授のポストまで奪われ、甲南高校という「離れ小島」に流されるという運命にさらされることになつたのである。

続けて野田弥三郎は、「失意の人として甲南に赴任したこの若い哲学者は、なげやりの講義ではなく力の限りをふりしぼつて私たちに語りかけたのであつた。私自身はそれをどの程度うけとめ得たかは言えないが、

その後の過程でマルクスやエンゲルス、さらにレーニンの哲学書を読むうえに大きく役立ったことは否めないのである」と記している。

学問を断念し、教育に情熱を傾けた蔵六であったが、それも長くは続かなかつた。甲南高校に就職して四年、一九二八（昭和三）年、突然病に犯される。藤岡眞佐夫の『父母の思い出とともに』によると、「ある日梨の皮を剥いていたら急に手が動かなくなつたのが発端」とある。甲南高校では授業を熱心に行い、一九二六（大正一五）年夏には中国視察団に幹事役として参加するなど、それなりの活躍もしていた。それが突然の病である。

家庭的には神戸に移ってから次男善志夫が一九二六年三月十三日に、三男和實夫が一九二七（昭和二）年十一月三日に生まれ、一家はそれなりに幸せな生活を送っていた。魚崎町の家は広く、二階には八畳間と控えの間があった。それが蔵六の病室となるのであった。彼は全身ギプスをはめて二階の部屋で養生する。学校は出勤したくもできなかった。

蔵六の病気は一体何であったのか。眞佐夫の『父母

の思い出とともに』には、母清恵からの伝聞として「阪大小沢教授に診て貰つたら脊椎カリエスだということだ。ギプスに一ヶ月入り不眠症になつたがこれは誤診ではないかという説もあった。東京で三宅博士に診て貰つたら文明病だといわれた」とある。とにかく不可思議な病である。若き日の蔵六の友、井川恭は青年時代神経症の胃病で三年間病との闘いの時期を送っている。蔵六自身も中学卒業後神経症の病で一年病床上に伏していた。当時は原因不明の病も多かつたから、精神とのかかわりが重視された。学問への郷愁が彼の「文明病」を呼んだのであろうか。

甲南高校で教育に情熱を注いだというものの、蔵六には哲学研究への夢があつたはずだ。高校生への教育と、時々招かれる関西地区の高校や専門学校での講演では、満足できないものがあつたのである。

以後、藤岡蔵六は病床の人として残りの人生を送ることとなる。甲南高校は特別配慮で一九三二（昭和六）年三月三十一日まで彼を雇用した。厚遇されたものである。創立者平生三郎の配慮があつたのである。それにしても満三十七歳にして、彼は社会の第一線か

ら身を引かねばならなかったのだ。

十二晩年

甲南高等学校を退職した藤岡蔵六は、やがて一家を挙げて東京に舞い戻り、渋谷区初台に住む。幸い母清恵の姉中川幸子が、経済的面倒を見てくれた。藤岡家には蔵六が闘病中の一九三六(昭和一一)年一月四日に四男昭<sup>あきひこ</sup>が生まれるので、五人の子をかかえ、その生活は容易ではなかった。それを応援したのが清恵の十六歳年長の姉幸子であった。幸子には子どもがなかったので、姪や甥を子どものようにして可愛がったのである。蔵六の長男眞佐夫は「戦前父が病気になるわが家が窮乏したときどれだけお世話になったか分からない」と『父母の思い出とともに』の中で書いている。

東京に戻った蔵六は、安静を医師に命じられ、しばらくは誰とも会わず、床に就いたままであった。野田弥三郎はその頃、蔵六を見舞ったが、会えなかったと記している。以下のようだ。

昭和十三年だっと思ったが、蔵六さんが病気で甲南をやめ、それは昭和六年のことだったが、東京に移って療養しておられることを聞き、渋谷区初台(？)のお宅を訪ねたことがある。玄關に出てこられた奥さんが、「今はどなたにもお会いせぬことになっていました」と言われ、一応病状をうかがって引き退ったのである。

蔵六の病はその後一時好転し、外出もできるようになったらしい。しかし、長い間の病床生活は、彼の肉体と精神を老化させ、その再起を不可能とするところまで追い込んでいた。出隆の『出隆自伝』の「第三夜 藤岡事件とその周辺」が、そのあたりのことを次のように書いている。

——実は、あの事件以後二十何年目かに、空襲々々と騒いでいたころ、突然、藤岡君が僕を訪ねてきてくれた。藤岡君は、ずっと長く脊随力リ工スでねこんだままで、再起不能だと言われ、やがては生死不明だとも伝えられていたので、突然訪ねて来られて驚ろいた。小石川の小日向台町の僕の隣

りの屋敷が、平生鈆三郎という、甲南高校の創立者で、文部大臣だった老人の別邸だったもので、藤岡君は、——病気になるまで甲南高校の教授だった関係でか、——その平生氏を訪ねたついでに、「お隣りが出君の宅だと聞いたもんだから」と言つて、立ち寄ってくれたんだが、そのときの藤岡君のいたいたしい姿を思いうかべると、話が、僕の話まで感傷的になつて客観性を失うおそれがあるが、とにかく、長く病床に首もつこかされないでコルセットをはめたままでねていたとかで、首が硬直して動かない、またそのようにその顔も無表情で、自分では、近ごろこうして出歩けるようになった、と言つてはいたが、話してみると、——ぼつぼつ仕事でもさがして、なにかやりたいと言つので、試みに最近の哲学界の話をしち持ちだしてみたが、とぼけた顔をしていて、話がとんちんかんで、——まるで竜宮城から帰ってきた浦島太郎と話してるようで、まあ、痴呆症というのが、気中毒でたまらなかつた。

長い間の闘病生活後の蔵六は、出陣をして「いたいたしい姿」だったと回想させ、「竜宮城から帰ってきた浦島太郎と話してるよう」、な感想を懐かせたというのである。

右の文章は、昔の姿とあまりに違つた蔵六に接した驚きの様子を伝えている。そこには字者としての道をあきらめ、それでも生きるために何かの仕事を求める哀れな「薄幸の哲学者」（野田弥三郎）を垣間見ることができるのである。

息子の藤岡眞佐夫の直話では、蔵六の病は、コルセットで首を固定したのがよくなかつたのではないかとのことである。眞佐夫はまた『父母の思い出とともに』に、「父は何も云わなかつたが、私は言語科から哲学科へ転じスピノザを研究していた出隆氏が後日東大の哲学科教授になつたのを知りおやつと思つた。あれだけ桑木敏翼教授に高く評価された父が健康だったら東大に戻つたのではないかと不憫に思つた」と書いている。

なお、同書に収録された『藤岡蔵六略歴』には、一九四〇（昭和一五）年八月の項に、「一五日 昭和一五

年度図書推薦に関する調査事務嘱託(文部省)」とあり、翌一九四一(昭和一六)年五月の項に、「一日 国史概説編纂嘱託(昭和一八年三月三二日まで、文部省)」の記事が見られる。

これは蔵六が当時生活の資を求めて得た、ささやかな仕事であったのだらう。眞佐夫の『父母の思い出とともに』には、一高以来の保証人松浦鎮次郎(同郷で元文部大臣)を訪問し、相談の結果得たそれぞれ月給百円の口であったとある。また、「辞令を買っても父は何もしなかつたと思つ」の感想も記されている。が、それは彼の能力を生かせる場ではなかつたのである。もはや蔵六にとつて、この世の仕事はさして興味のある対象ではなく、甲南高校を退職した時点で、彼の存在の意味は失われていたのである。

第二次世界大戦前後の蔵六一家の生活は苦しかった。渋谷区初台の家は売り、留学中に買い溜めた専門図書も手放した。富山に疎開した家財は空襲で焼失した。妻清恵は蔵六の看病をしながら、枇杷の葉の温灸の仕事や、それがうまくいかないと初台の信用金庫に会計係として勤めるなど、一家の家計を支えるために働い

た。長男眞佐夫が東大から学徒出陣して広島県の江田島の兵学校に主計課士官として勤務していた時、蔵六一家(蔵六、妻清恵、弟善志夫、昭)は、一時、眞佐夫の配慮で江田島に移り住んでいる。一九四五(昭和二〇)年六月から敗戦の八月までのことである。戦後は対岸の岩国の兵学校住宅に一九四八(昭和二三)年秋まで住み、その後眞佐夫が渋谷区幡ヶ谷本町に新築した家に移った。

藤岡蔵六が『父と子』を執筆するのは、死の二年前ごろからで、岩国在住中の一九四八(昭和二三)年七月一六日に擱筆した。「はしがき」には、「近頃病や、小康を得たので、新に筆を執り、父と私との回想録を一つに書き上げ、『父と子』と題して出版することにした。曾て日本にこのような親と子とが生存していたことを知って頂ければ、著者に取りて望外の光栄である」と記されている。数十冊の日記と数冊の感想録と二冊の反省録など、資料をすべて戦災で失いながら、蔵六最後の打ち込みになる回想録である。

「岩淵村、藤岡」にはじまり、「父の死」までの一二一章を、蔵六は少しずつ書きためるようにして書い

ていった。すでに彼は死を意識していた。そこには何らのてらいも感傷もなく、たんととその前半生を語っている。東大文科哲学科へ入学した一九一三（大正二）年の十一月十九日の父の死で終わり、以後の日々が記されていないのは、後半生に興味を見出せないためなのだろうか。「仲のいい三羽鳥」（出隆）と称された芥川龍之介・恒藤恭のほか、その周辺の長崎太郎らとの交流のあつた一高時代までが、記憶の底から呼び戻されているのである。病んで老いたとはいえ、記憶力は衰えていない。それは華々しかつた前半生故のことかも知れない。逆に和辻哲郎との論争以後のことは、思い出したくもなく、忘却の彼方に追いやつてしまったのである。その死は『父と子』を書き上げた翌年の一九四九（昭和四）年十二月二十一日のことであつた。

芥川龍之介の「学校友たち わが交友録」に導かれて、この人物に光りを当てる作業を進めてきて判明したことは、藤岡蔵六の後半生の不遇な日々である。芥川言うところの蔵六の「理想主義」とは、常に向上の意欲をもって歩むということにあつた。彼はその「理想」の追求のためには他を顧みなかつた。迷惑さ

えかけなければよいとして彼は己の道を歩んだ。しかし、偏狭な学者社会はそういう彼の歩みを認めなかつた。芥川が言うように、それが彼を「損」な立場に追いやつたのである。

藤岡蔵六は都落ちして甲南高校に行つた後、教育に精を出したものの、学問は断念してしまふ。研究者は日々書かなければ考えは深まらないし、成果を發表しないかぎりその存在は忘れられる。健康を害したことは、致命傷であつた。それにしても和辻哲郎の蔵六批判は、研究者としての藤岡蔵六の存在に止めを刺したことになる。

世には能力がありながら、真価を發揮し得ず、埋もれてしまふ人がいる。芥川龍之介はその例に蔵六をとりあげ、「藤岡位損をした男はまつ外にあらざるべし」と断じた。鋭い洞察力というべきだろう。その上で「天下の人は何と言ふとも、藤岡は断じて辣腕家にあらず。欺かし易く、欺かれ易き正直一箇の学者なり」と書いて蔵六を擁護したのである。

注

- (1) 藤岡蔵六『コト純粋認識の論理学』岩波書店、一九二一年九月一〇日
- (2) 和辻哲郎「漱石の人物」『新潮』一九五〇年二月一日
- (3) 和辻哲郎「自叙伝の試み」岩波書店、一九六二年二月二〇日
- (4) 芥川龍之介『MENSURA ZOLL』『新思潮』一九一七年一月一日
- (5) 小著『芥川龍之介 闘いの生涯』毎日新聞社、一九九二年七月一〇日
- (6) 芥川龍之介「学校友たち わが交友録」『中央公論』一九二五年二月一日

- (7) 藤岡眞佐夫「父母の思い出とともに」私家版、一九九八年一月(日付なし)
- (8) 野田弥三郎「薄幸の哲学者……藤岡蔵六さんを偲ぶ」『萌芽会報』第二号、一九八二年六月二三日
- (9) 島之夫「藤岡眞佐夫宛書簡、一九八一年九月八日付」
- (10) 志田延義「藤岡眞佐夫宛書簡、一九九八年十二月十一日付」
- (11) 波多野精一『西洋哲学史要』大日本図書株式会社、一九〇一年一月一〇日
- (12) 大西祝『西洋哲学史』初版一八九三年、蔵六の用いたのは警醒社書店版、上巻、一九〇三年九月二日、下巻、一九〇四年一月六日
- (13) 注8に同じ